

2019 年度 センター試験 国語（現代文）（本試験） ワンポイント解説

<p>第1問</p>	<p>問 1</p>	<p>特に難しい問題はなく、基本レベルの出題であった。</p>
	<p>問 2</p>	<p>傍線部 A「翻訳家とはみなその意味では楽道家なのだ」の中の、「その意味では」の指示内容がポイント。傍線部直前の一文に、「心の中のどこかで奇跡を信じているような楽道家でなければ、奇跡を目指すことなどできない」とあるので、「奇跡を信じてそれを目指す」という意味で「楽道家」だと述べていることが分かる。そこで、「奇跡」とは何かだが、<b>4</b>段落の第 2 文「まったく違った文化的背景の中で、まったく違った言語によって書かれた文学作品を、別の言語に訳して、それがまがりなりにも理解されるということじたい、よく考えてみると、何か奇跡のようなことではないのか」という記述に突き当たる。つまり、文化的背景と言語が異なる文学作品が別の言語で読んで分かることが「奇跡」であり、それを信じて目指すという意味で、翻訳家は「楽道家」なのだと思えることができる。これをズバリと言いつけているのは、選択肢<b>4</b>しかない。②「たいいていのはたやすく翻訳できる」、③「質を問わなければおおよそのところは翻訳できる」というのは、「楽天的な考え方」の説明としては本文に記載があるが、これらは傍線部「その意味では」に対応していないので誤り。①の「誰でも優れた翻訳家になれる」は、そもそも本文で述べられていない。⑤は、悲観的な考え方を論じる文脈で否定されている内容。</p>
	<p>問 3</p>	<p>理由説明問題であるが、傍線部と本文の理解ができていれば、あとは選択肢との照合で判断できる。まず傍線部 B「これはむしろ翻訳を回避する技術なのかも知れない」の指示語「これ」の内容だが、直前文の「そのように言い換えが上手に行われている訳」を指している。これはつまり、「近似的な『言い換え』」という翻訳戦略(<b>8</b>段落)のことである。この戦略の場合、同じような状況下では日本人ならどう言うのが「自然」かを考え、日本語としていかに「自然」で「こなれた」訳文を作るかが腕の見せ所になる、というのが本文の内容である。とすると、このような翻訳は、日本人には読みやすい「自然」な日本語ではあるものの、もとの言葉をきちんと訳したことになっていないかもしれない。従って傍線部 B「翻訳を回避する技術なのかも知れない」ということになるのである。この内容を押えた選択肢は、<b>2</b>しかない。①「日本語のあいまいさを利用して」という内容は、本文にはない。③は「忠実に原文を再現するというやり方を「翻訳の理想」としているが、このような主張は本文にはない。④は「直訳的に翻訳しておく」とあるが、そもそもここでの翻訳の論点とはずれているし、「自然な翻訳を追求する努力から逃げることになる」というのも、傍線部 B「翻訳を回避する」の説明として完全に誤っている。⑤「文学作品の名訳や先輩翻訳者の成功例などを参考に」「適切な言い換え表現を自ら探求するという翻訳家の責務をまぬがれる」などの表現は、本文に該当する内容が存在しない。</p>
	<p>問 4</p>	<p>傍線部 C の内容を捉えた上で、翻訳についての筆者の考え方を問う問題である。選択肢がどれも 2 文からなっていて、1 文目「翻訳の正しさとは、……に関わるものである」が傍線部 C に対応しており、2 文目がそこからうかがえる筆者の翻訳についての考え方の説明になっている。選択肢<b>1</b>は 1 文目の「意味的にも構造的にも一対一で対応すべきという学問的な原則」が、本文中に記載がない。③「翻訳家の技術の問題」は、傍線部 C「そもそも正確な翻訳とは何かという言語哲学の問題」の説明としておかしい。「言語哲学」という以上、言語の「本質」に関わるものであるはずだからである。また、「言語哲学的な定義に則して」とあるが、本文にそのような定義はない。④の 2 文目「翻訳家は自然な日本語に訳すことと原文の意味や構造を崩すことなく訳すことを両立させ、時代を超えて通用する表現を目指すべき」といった内容は、本文に記載がない。⑤「原文の意味を自然な日本語で効率的に伝える」「原文の構造に即して忠実に伝達する」「学問的に定義して決定していくべき」といった説明は、本文にない。筆者の考え方を正しく示しているのは、<b>2</b>のみである。</p>

	問 5	<p>会話文仕立てになっているが、翻訳の仕事についての内容一致問題。本文の趣旨と「異なる発言」とあることに注意。選択肢②が本文の趣旨と異なり、正解である。生徒 B は「時代や文化の違いをなるべく意識させずに読者に理解させること」が「翻訳の仕事の基本」だと言っているが、まず「時代の違いを意識させない」という視点は本文にはない。また、そもそも筆者は「翻訳の仕事の基本」を文中で規定していない。</p>
	問 6	<p>本文の表現と構成について問う問題。選択肢と本文を丁寧に照合する必要がある。</p> <p>(i) 「適当でないもの」を選ぶ問題。 ④「あの時の少年は一体どんなことを考えたのだろうか」は、過去の自分が今の筆者の翻訳の仕事を知ったらどう考えるだろうかという問いであって、「過去の自分が考えたことを回想し、当時を懐かし」んでいるのではないため、「適当でないもの」として正解となる。</p> <p>(ii) ①「支持する立場を一方に確定させている」がおかしい。 ③「過去のエピソード」は、「筆者が現在の職業に就くことになったきっかけ」を紹介しているわけではない。 ④「筆者の考える正しさを示し」とあるが、本文でこれは述べられていないのでおかしい。</p>
第2問	問 1	<p>(ア)「お手のもの」は「慣れていてたやすくできる得意のわざ」という意味である。 (イ)「肚を決める」は「決意する」という意味である。 (ウ)「目を見張る」は「驚いて目を大きく見開く」という意味である。</p>
	問 2	<p>この場面における「私」の妹に対する気持ちや向き合い方を問う設問。まず傍線部 A から「自分だけ好きところを占領するのは気がひけたので、そこの一部を割いて…植えさせた」(a)とある。また、10 行目で「いかにも百姓が妹の身に染みている」、16 行目で「作りはじめると、妹は急に生き生きとして来た」と感じている(b)。そして、17 行目で「私…と同じく…心が慰まるからにちがいない」(c)とある。以上の a～c の要素を含む選択肢③が正解。なお①は「一緒にたくさんの野菜を育てることで…妹を励まそう」、②は「妹に接し、気後れしていた…妹との関わりは失った月見草に代わる新しい慰め」、④は「妹に対する居心地の悪さを解消する」、⑤は「将来の希望を見出したような思い」がそれぞれ本文の当該場面に記述されていない。</p>
	問 3	<p>傍線部 B「よろこばしい」と感じた理由を問う設問。傍線部 B の「それ」とは 65 行目「O 君が月見草の大きな株を手いっぱい持って、あがって来た」ことを指す。59 行目で「もうあと十分(釣りを)やるから、君は月見草を引いててくれない?」と、この時点で月見草に興味を示していなかった O 君が「十分」少々の時間で月見草を「持って、あがって来た」ことについて、まずは私が驚いたことが類推できる(a)。また、それを傍線部 B「よろこばしい」と感じたということは、O 君が月見草に興味を示し、私のために持ってきてくれたことが嬉しいのだらうと推察される(b)。以上の a・b が傍線部 B「よろこばしい」と感じた理由である。これらを指摘した選択肢⑤が正解。なお、①は「月見草を失った自分の憂いが解消してしまうような爽快なもの」、②は「月見草を傷つけまいと少ししか…とらなかった自分」、③は「O 君が、短い時間で手際よく」、④は「違いを考慮せずに無造作に持ってきた O 君」が、いずれも本文に記述されていない。</p>
	問 4	<p>傍線部 C 前後の「私」の心情を問う設問。まず 81 行目から傍線部 C にかけて「サナトリウムの建物…(の)部屋々々に灯がつきはじめ…それを見ていると、突然…病院にいる妻のことを思い出した」(a)とある。また、傍線部 C の後、87 行目に「寂しさがこみあげて来た。…サナトリウムの方へ歩いて行った。…妻もこのサナトリウムに住んでいるかの如き気持」、91 行目で「妻よ、安らかなれ、と…感傷的で、涙が溢れそうであった」(b)とある。以上の a・b に言及した選択肢②が正解。なお、①は「忘れようと努めていた妻」、③は「妻もまた健やかに生活しているような錯覚」、④の「妻の病を忘れていた」、⑤の「妻がいつまでも退院できないのではないかという不安」がいずれも本文の記述と合致しない。</p>

第2問	問5	<p>傍線部 D に至るまでの月見草に関わる「私」の心の動きを問う設問。つまり、106 行目までの「私」の心の動きについての記述が検討対象となる。93 行目「サナトリウムを後に(=是政の駅に向かう途中)…歩いていると…涙など一遍に引っ込んでしまった。…今開いたばかりの月見草が、私を迎えるように…咲き揃っている…その先一面どこまでも咲きつづいているような感じ」(a)、また 103 行目に「(是政の駅を出た)ガソリン・カーが走ってゆく前方は、すべて一面、月見草の原…三方から…顔を出したかと思うと…後へ消えてゆく」(b)、そして傍線部 D で「花の天国のようだった」とあり、これまでの「空虚な気持ち」(前書き)から解放され、非日常的な楽しみを得たことが想像される(c)。以上 a～c を言い当てた選択肢①が正解。②は「橋番の悲観的な言葉などによって…心配になった」、③は「妻の病も回復に向かうだろうという希望」、④は「運転手は死に魅入られてしまっているのではないか」、⑤は「自分と妻の将来に明るい幸福を予感させてくれた」が本文の記述と合致しない。</p>
	問6	<p>本文の表現に関する説明を問う設問。正解は選択肢④と⑥。①は「妹の快活な性格」が本文中に記述されていない。本文 16 行目にあるように野菜を「作りはじめると…生き生きとして来た」のであり、快活なのは野菜をつくるようになってからの「ふるまい」である。②は「体言止めの繰り返し」から「O 君と一緒に是政に行く旅が、『私』にとって印象深い」ことを読み取ることに無理がある。③は「緊迫感」を伴う情景描写が、⑤は「『私』の状況が次第に悪化していく過程」がそれぞれ選択肢の指摘する箇所に記述されていない。</p>

2019年度 センター試験 国語(古典) (本試験) ワンポイント解説

<p>第3問</p>	<p>問1</p>	<p>(ア)は「しづ心なく」「奉り(謙譲語の補助動詞)」「あさましけれ」の意味を全て含むものを選ぶ。                  (イ)は「いかにして」の意味として②・③・④いずれもありうるから、ここでは文脈判断が必要である。本文では傍線部に続いて「…心を慰めばや」となっており、傍線部は願望の終助詞「ばや」と構文を作っていることから、④が正解である。                  (ウ)は「おぼえ」の意味として③「評判」と⑤「寵愛」いずれもありうるから、ここでも文脈判断を必要とする。傍線部中の「この人」とは「玉水」を指す。傍線部の前述部では「玉水」の「評判」ではなく「(姫君による)寵愛」が話題となっているから、⑤が正解である。</p>
	<p>問2</p>	<p>a は謙譲語で「客体(動作の受け手)」に対する敬意、b は丁寧語で「対者(話の聞き手)」に対する敬意、c も丁寧語で「対者(話の聞き手)」に対する敬意、d は謙譲語で「客体(動作の受け手)」に対する敬意である。a～d それぞれについて、敬意の対象を一つずつ確かめながら答える。</p>
	<p>問3</p>	<p>傍線部 A の「いたづらに消え失せなむ」に着目すると、容易に正解を得られる。また、傍線部 A の直前の「およばぬ恋路に身をやつし」を踏まえているのは、⑤「かなわぬ恋に身も心も疲れきって」だけである。</p>
	<p>問4</p>	<p>傍線部 B の前述部「さもあらむ人に見せ奉らばや」は、「見す」に「結婚させる」の意があり、「主の女房」が「この娘」の「縁談」を進めていることを指す。傍線部 B の「つやつやとうちとくる気色もなく、折々はうち泣きなどし給ふ」は「(縁談を)喜ばず沈んだ様子を見せる」ことを意味する。以上の二点から、正解は③である。なお、選択肢③の「自分の願い」とは、具体的には傍線部 B の後述部の「ただ美しからむ姫君などの御そばに侍りて、御宮仕へ申したく侍るなり」を指している。</p>
	<p>問5</p>	<p>昨年に引き続き、傍線部を付さない設問である。ここで問われているのは「狐が娘に化けた理由」である。その「理由」は、問題文の第一段落と第二段落で叙述されているということを読み取れたかどうかが重要である。正解の①の「男に化けて姫君と結ばれれば姫君の身を不幸にし、両親を悲しませることにもなると思い」は問題文第一段落の6～7行目の「狐」の心内文を、「せめて宮仕えのできそうな美しい女に姿を変えてそばにいられるようにしようと考えた」は第二段落の1～3行目を、それぞれ踏まえている。                  ②は「養い親から大事に育てられるし」以降の記述内容が、③は「男の姿よりも天性の優美さをいかした女の姿の方がよく」以降の記述内容が、④は「愛しい人をだますことになるが」以降の記述内容が、⑤は記述内容のすべてが、それぞれ誤っている。</p>
	<p>問6</p>	<p>「狐」の化けた「娘」が「玉水」という名で「姫君」のもとに出仕するようになった経緯は第三段落の中ほどあたりで叙述されている。しかし、ここで問われているのは「姫君との関係において、玉水のどのような姿が描かれているか」であるから、ここでは「姫君との関係」における「玉水」の描写を問題文中から見出すことが先決である。それは第四段落の、「ほととぎす」を題に「姫君」と「玉水」の「連歌遊び」以降の叙述にある。正解の②は、第四段落全体のうち、特に6行目を踏まえて作られている。                  ①は「最愛の姫君と歌を詠み合うことに熱中するあまりに、周囲の不满に気づけない」という説明が、③は「姫君が密かに心を寄せる殿上人の存在を感じ取ってしまう」と「姫君の恋を応援しようとする」という説明が、④「姫君はその内実をしつこく問い詰める」と「その姫君に対し、…冷たい応対をせざるを得ない」という説明が、⑤は「涙にくれるような状況にある」以降の説明が、それぞれ誤っている。</p>

第4問	問1	<p>語句の意味を問う設問である。 「文中での意味」とあるので、傍線部の前後の内容も合わせて吟味する。(ア)「対」は「こたへて」と読んで「こたえて」の意である。(イ)「乃」は「すなはち」と読み、さまざまな意味用法があるが、ここでは前後の内容のつながりから「やっと」の意になる。</p>
	問2	<p>傍線部から読み取れる人物の状況説明が問われたのは初めてである。 内容読解問題は設問の選択肢にヒントがあることが多い。この設問では、選択肢の前半は「杜甫」の状況が問われている。②・④の「実の母でもない叔母に」が該当し、他は本文に書かれていない。選択肢の後半は「叔母に孝行を尽くしている」「叔母に孝行を尽くしていない」に二分される。「孝義之勤若此」の「若此」は直前の「制服～於斯(=注 2・3)」を指す。このことから「叔母に孝行を尽くしている」ことがわかり、選択肢①・②・⑤に絞ることができる。前半・後半とも該当する②が正解となる。</p>
	問3	<p>傍線部の心情を抱いた理由説明問題である。 傍線部の意味は設問に記されているので、傍線部外から理由を探さなくてはならない。傍線部Bは杜甫の発話の最初の一文であるので、傍線部後述の内容から考える。直後の「亦為報也」から選択肢①「孝行を尽くした」、③「恩返し」、④「孝行する」、⑤「善意に応えている」が該当する。正解を導くためには、さらに後方に目を向けて、傍線部C(問4)、傍線部D(問5)を解釈しなくてはならない。選択肢が短くわかりやすく、一見すると解答しやすいと思われるが、実は後方まで読み込まないと解答できない。その上ポイントになる部分が設問になっており、一筋縄では解けない設問である。後述する問4・問5の解答から吟味して、選択肢⑤が正解となる。</p>
	問4	<p>昨年は書き下し文と解釈が別々に問われていたが、今年はセットで問われている。 例年、書き下し文を問う設問は頻出句形・重要語句が解答ヒントになるが、今年は傍線部にヒントがない。傍線部にヒントがなければ、選択肢に注目する。選択肢の後半の書き下し文・解釈がすべて同じなので、前半を吟味すると「処」の解釈がすべて異なる。重要語句ではないので傍線部前後の内容から判断する。傍線部直後の「易子之地以安我(=「子」と場所を交換して「我」を安全な場所に置いた)」と傍線部D(問5)の解釈から選択肢③が正解となる。この設問も問3同様、後の設問とセットで考えなくては正解を導くことは難しい。</p>
	問5	<p>傍線部の内容説明問題である。 傍線部は「我用是存」と「姑之子卒」が対比されていることに注目する。「(人が)卒ス」で「(人が)死ぬ」の意になることから「存=生存」の意とわかり、選択肢①・⑤に絞る。選択肢前半では「是」の指示内容が具体的に問われている。指示内容は前述内容に注目するので、直前の問4の解答から⑤が正解となる。この設問も他の設問とセットで考えなくてはならず、設問同士の解答の関連を考えながら解く視点を持つことが必要である。</p>
	問6	<p>傍線部の内容説明問題である。 「焉」の指示内容が問われている。選択肢はすべて「叔母は魯の義姑のように( )ので、義と呼べるということ」となっており、( )の内容を考えればよい。直前の「魯義姑…割私愛」から選択肢②が正解となる。</p>
	問7	<p>傍線部の内容説明問題である。 問6同様選択肢がきれいに作られている。「杜甫は( )叔母のために、韻を踏まない銘を記した。それは( )ためである」となっており、叔母の説明、杜甫の考えが問われている。叔母の行動は、第1段落(=問4・問5)に記され、さらに第2段落で魯義姑に例えられている(=問6)。ここから選択肢③・④・⑤に絞ることができる。杜甫の考えは、傍線部F「蓋情至無文(思いがいっぱいになれば、文はいらない)」に記されており、文章で記すはずの墓誌名に「有唐義姑」と一言記した行動も合わせて判断することができる。 例年、最後の問には本文全体の内容を問う設問が出題される。今年は傍線部説明の形式ではあるが、実は文章全体の理解を問う設問になっている。</p>